平成２７年度　「心に響くふるさとの道徳指導資料（中学校編）」

指導資料の活用に当たって

平成２７年度「心に響くふるさとの道徳指導資料（中学校編）」の作成に当たっては、基本的に次のことを踏まえました。

１　主題名について

主題名は指導内容を端的に表現したもの、あるいは資料の内容を表したものが望ましいと考えます。特に、生徒の発達の段階を十分配慮して表現を工夫し、ねらいの達成の一助となるようにしました。

２　資料名とその出典について

道徳の時間（道徳科）に生かす教材は、生徒が道徳的諸価値の理解を基に、自己を見つめ、人間としての生き方についての考えを深めていくための手掛かりとして極めて大きな意味をもっています。特に、郷土の先人の伝記は、生徒が身近に感じることができ、生きる勇気や知恵などに触れることができるとともに、人間としての弱さを吐露する姿などにも接し、生きることの魅力や意味の深さについて考えることができます。

そこで、「『郷土の道徳　郷土史研究にうちこむ－中学校用－』（岐阜県教育委員会）」（平成１３年１１月）に掲載されている資料等を中心に取り上げ、より効果的な指導方法を示しました。

３　主題構成表について

主題構成表は、道徳の時間（道徳科）の指導内容を明らかにし、本時のねらいを明確にするものです。どの指導事例も、授業者の基本的な構えや手順として、次の６点を大切にしました。

⑴　ねらいとする道徳的価値の分析

・一つの内容項目にも、複数の道徳的価値が含まれています。そこで、どの道徳的価値で指導するのか、焦点化を図る必要があります。

・人として生きる上で、その道徳的価値にどのような意味や必然性があるのかを考え、道徳的価値の本質をつかみます。道徳的価値についての授業者の捉えの深さが、授業での生徒の追求の深さに大きく関わってきます。

・生徒の発達の段階や道徳性の実態から、特に重視する内容は何かを具体化します。

⑵　生徒の実態・意識の要因の把握

・具体的な行動から、まずはよさとして認められることに着目し、それを生徒の道徳性のよさとして捉えます。

・ねらいとする道徳的価値から、生徒の行為を支える意識について、自分自身や他者との関わり、対象との関わりなどの視点から多面的に捉えるようにします。課題となる意識の要因について

探り、ねらいや展開に結び付けることで、道徳の時間（道徳科）において気付かせたいことや育てたい判断力や心情等を明らかにすることができます。

⑶ 資料の分析

・授業を構想するに当たり、次に示す４点に留意しながら資料を読み込むようにします。

①ねらいとする道徳的価値や展開にとらわれて狭い視野で読むのではなく、一人の人間として、主人公の生き方の素晴らしさは何かを考えながら読むこと。

②人としての弱さやもろさと、強さや素晴らしさのそれぞれを兼ね備えた主人公の生き方を読み取ること。

③資料の登場人物等の言動は、主人公の言動と対照的に描かれていることが多くあり、こうした言動にも注意しながら読むなど、資料を多面的に読み込むこと。

④ねらいとする道徳的価値からみた生徒の実態を基に、資料のどの場面を取り上げるかを吟味すること。

⑷ 本時のねらい

・⑴～⑶を踏まえ、焦点化した道徳的価値を基に、学年の発達の段階を考慮し、生徒にどのような感じ方や考え方を深め、ねらいに迫っていくかを明確にします。

・ねらいは、道徳的価値に照らして簡潔に表現します。本指導資料の事例では、より指導の構想が考えられるよう、「～しようとする心情を育てる。」ためには、どんなことに気付かせることが大切か、そのためには何を考えさせることが必要かを明らかにして、「…に気付き、～しようとする心情を育てる。」という書き方によるねらいを設定しています。

⑸ 展開の構想・基本発問

・「４⑴学習指導過程の工夫について」を参考にして、導入・展開・終末の各学習指導過程において目指す生徒の具体的な姿を描きます。

・生徒の心の動きに即し、ねらいに迫るための基本発問と中心発問を考えます。

⑹ 「私たちの道徳」の活用

・「私たちの道徳」は、道徳の時間（道徳科）においてだけでなく、各教科等の学習や、家庭に持ち帰って活用するなど、道徳の時間（道徳科）との関連を図った指導を行うことが大切です。本指導資料では、いつ、どのような活用の仕方が効果的なのかについて、事例を示しています。

４　学習指導過程について

⑴ 学習指導過程の工夫について

学習指導過程は、生徒がねらいとする道徳的価値についての自覚を深めることができるようにするための単位時間（授業）の手順を示すものです。実際の指導に当たっては、生徒の実態や扱う資料の特性等によって、多様な学習指導過程が考えられます。

平成２６年１０月の「道徳に係る教育課程の改善等について（答申）」（中央教育審議会）において、道徳の授業について特に小学校高学年や中学校において課題が大きいと指摘されたことを踏まえ、人としてどのように生きるかということについて、一人一人が主体的に考えを深める

ことができるよう、意図的に学習指導過程を構成しました。例えば、読み物資料の主人公の心情を考えることに終始する授業にならないよう、展開前段から自分自身の生活を振り返って考えを深めることができるような展開を意識しました。

ここに示したのは、一例です。固定化、形式化することなく、常に、工夫・改善を図ることが大切です。

◇導　　入→主題に対する生徒の興味・関心を高め、学習への意欲を喚起します。

・ねらいとする道徳的価値について、生活経験を想起できるようにするなど、授業の方向付けをします。

・使用する教材によっては、写真やＶＴＲ、効果音などを使った効果的な導入の工夫をします。

◇展開前段→資料に描かれた主人公等の行動や生き方を通して、ねらいとする道徳的価値の理解を基に、自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深めます。

・ねらいとする道徳的価値について、自己の生き方と結び付けながら追求し、より確かな理解ができることを目指します。

・主人公の揺れ動く心やよりよい生き方の実現に向かう心の有り様を、じっくりと追求します。

・この段階では、役割演技や話合い活動等による追求が中心になります。より深まりのある授業にするために、役割演技の位置付け方や扱い方、生徒同士による話合い活動の位置付け方、板書の生かし方などの指導方法を工夫することが大切です。また、様々な価値観について多面的・多角的な視点から考える場面を設けたり、生徒が多様な見方や考え方に触れながら、更に新しい見方や考え方を生み出したりできるよう留意することも大切です。

◇展開後段→追求した道徳的価値を自分自身の現在及び将来の生活の中においてどのように実現していくかを考えたり、自分自身の生活を振り返って考えを深めたりします。

・ねらいとする道徳的価値についてまとめたり整理したりすることで学習を振り返ります。

◇終　　末→単位時間の授業のまとめをする段階であり、一人一人が見つめた生き方を今後の生き方へと結び付けます。

・生徒がこれからの自己の生き方について、憧れや希望を抱いて授業を終えられるように、生徒が感想や考えを発表したり、教師が説話や体験談を話したり、補助的な資料を提示したりするなど、指導方法を工夫します。特に、実践への意欲を高める内容を位置付けることが大切です。

⑵ 発問の工夫について

中学生という発達の段階を踏まえ、ねらいに応じて、主人公等の心情を問う発問のほかに、判断を問う発問や理由を問う発問などを加えました。発問によって生徒の問題意識や疑問などが生み出され、多様な感じ方や考え方を引き出すことができます。そのためにも、考える必然性、切実感のある発問、物事を多面的・多角的に考えることができる発問などを吟味することが大切です。

また、本指導資料の事例では、学習指導過程において、ねらいを達成するために必要な道筋をつけていく一貫性のある問いかけを基本発問として「○」、これなくしてはねらいに迫れない最も重要な発問を中心発問として「◎」で表記しています。また、ねらいとする道徳的価値についてより深く追求していくための「深めの発問★」を中心発問の後に位置付けています。「深めの発問」は、実際の授業では、生徒の反応等学習の状況に応じて、発問の必要の有無も含めて、問いかけ方を変える可能性が高いものです。しかし、生徒に道徳的価値をどこまで捉えさせたいのかを事前に明確にするためにも、この「深めの発問」を事前に吟味しておくことは、とても重要なことです。

(3) 変容の見届けについて

「変容の見届け」として、道徳の時間（道徳科）の中で授業者がどのような観点で評価するとよいのかを表記しました。道徳性を育むために、生徒が道徳的価値の理解を基に、自己を見つめ、人間としての生き方についての考えを深める学習とすることができたかが大切になります。そのため、授業者は生徒にどのような学びを期待するのかを「変容の見届け」に具体的な生徒の姿として位置付けています。

5　他の教育活動との関連

学校における道徳教育は、学校の教育活動全体を通じて行うものであることに留意して、道徳の時間（道徳科）の指導と他の教育活動との関連について例示しました。「道徳の時間（道徳科）と他の教育活動との関連図」の作成に当たっては、以下の２点を基本的な構えとしてまとめました。

(1) 道徳の時間（道徳科）を要として、その前後に生徒が主体的に関わる教育活動を構想し、それらの一連の過程を位置付けました。また、一部改正学習指導要領解説　総則編（抄）にも引き続き「各教科等における道徳教育に関わる指導の内容及び時期を整理したもの（中略）を別葉にして加えるなどして」と記述されていることを踏まえ、教科指導との関連を明記するようにしました。

(2) 生徒の意識を想定し、高めていくための指導・援助を具体的に示しました。生徒の意識を高めていくためには、どのような場で、どのような指導・援助が有効か、また、どのような教育活動で行為や意識が把握できるかなど、効果的な関連が大切なポイントになります。そこで、関連する教育活動における指導・援助について具体的に示しました。